Nakatsuji, K. — Records of spider-collecting-tour to the
Island of Izu-miyake.

伊豆三宅島採集記

仲 辻 耕 治

東京農業大學昆蟲學教室

〔昭和十一年五月二十五日受領〕

去る四月十五日より十八日迄の四日間三宅島に於ける乳牛ホルシュタイン種に寄生する壁蝨の發生狀態調査の目的を持って渡島した際に採集又は見聞した動物（主に蜘蛛類）に關して記す。

三宅島は伊豆七島中北より五番目の島にして東京靈岸島を去る南へ100 哩、面積3 平方里餘の略圓形を呈して中央に海拔813 米の雄山^{フヤマ}を有し、其の裾野は海岸に迫つて到る處に絶壁を作り加之海岸は單調にして出入殆ど無く舟付場は至つて悪い。

島人の生業は半漁半農にして豚殊に乳牛の飼養多く島の經濟はむしろ乳牛即牛乳製品に依て維持されて居る觀が有る。彼等の食物は東京より購入される米と島で作物の大部分を占める甘藷と里芋にして、后二者は間食又は晝食の時に鹽辛を附けて食している。

島の中央に聳え立つ山の神、雄山は明治七年噴火以來其の活動を中止してゐる。島人の云ふ處に依ると雄山は爆發しても人畜に害を加へず焼き掀げると。三宅の名も恐らく身を焼くより轉化したものであらうと思はれる。

島は五ヶ村より成り、各村とも乳牛の飼養盛にして各戸2—5頭を有しているが、島中神着村は他村に比して壁蝨發生甚大にして、若し島人以外の者が之

の寄生を受けた場合
其の咬傷部は濕疹を
起し全快する迄約一
ヶ年近くも掛ると、
村立病院長林憲氏は
以上の内容の手紙と
共に四種の壁蝨をア
ルコール漬にして東
京農業大學の常谷幸
雄氏を通じて著者に

三宅神着村より雄山を望む

送られた故、著者は岸田久吉先生の鑑定を請ふた處に種と判明した。(*Haemaphysalis flava*. Neumann イヌマダニ及 *H. sp.*) 神着村に於ける壁蝨發生の甚大なるは渡島前に恐らく放牧する結果畜體に寄生する機會を與へしめる爲であらうと考へていた處豫期通り、雄山の長き裾野の緩傾斜面を移用して放牧をしてゐるが、他村に於て以前に於ては放牧を行はれたが現在では止めてゐる爲非常に少い。之は大島等に於ても同様な事が在つたと云はれて居る。

島では青草の無い冬期(12月—3月頃)の間蘆の葉を飼料として施與なし、著者の渡島中には未だ一部の乳牛には與へられていた。椎の葉を飼料とする事は他處で見られない本島の特異とする處であらう。

本島が動物學的に興味ある事は小笠原諸島と同様爬蟲類はトカゲのみであつて蛇類は棲息せず、時々時化の時に流木と共に漂着しても何處かへ姿を消した後再現した事は無いと云はれ、其の代りトカゲ(フカダトカゲ *Eumeces latiscutatus okadae* Steineger)の多い事は三宅島を除いては餘り無いだらう。本島に於てのみ蛇類の棲息しない事は伊豆七島の不思議の一であらう。棲息不能の原因不明で、著者は餌の關係が最も大なるもので無からうかと考へているが、野鼠の多い事は此の島の作物の脅威の的である。此の點専門家の研究をお願いし

度い。

之の島に俗に山猫と云つておる尾長が體長よりやゝ長い猫が居る事である。阿古村の山田常太郎氏の話によると「雄山には前記の如き尾の長い山猫が多数棲息していたが現在では

時々しか発見しないが、稀に山猫が人家に近付き飼養されている猫と交尾なし其の子供即第一代雜種猫は普通猫より鼠を捕獲する事巧妙で坪田村に於ては非

野外に於ける乳牛の飼養（三宅島伊ヶ谷村）

ダグモ *Atypus karschi* の住居

常に珍重される、又猫がトカゲを食ふ場合は鳴聲悪くなり次第に衰弱すると云はれると。島で云ふ山猫は飼養猫が再び野生化したものであらう。殊に野鼠多い島故有り得る事かも知れない。

蜘蛛類中伊豆七島に於て未だ其の發見を聞か無いデグモ *Atypus Karschi* Doenitz 及ワスレナクモ *Calommata signata* Karsch が今度の渡島に於て採集された事は意外の獲物であつた。現在は分布的な事は少く措き記録に止めたい。前者は全島到る處、椎の幹の根本に或は笹の地際に地中より地上3—4寸許り小指程の太さの尖細くした巢は

空中制覇へのプロローグである。後者は前者の間に混つて僅かに一匹発見しものである。

次に眞黒い腹部の前縁に鮮黄色の前曲せる條斑を有することに依て名刀黄金丸の名を岸田先生より頂戴したコガネマル *Tyrolida pulcher* Kishida は本州に於ては多く土中、石下、積石の中に越冬中を發見されてゐるが、本島では開鑿された上壁の凹處にオホヒメクモの巢を縮小した直徑3寸位の網を張り一見すれば巢だけ置去られたものでは無いかと思はせるが良く見ると凹處の奥に更に管巢の入中が發見され、此の管巢の奥底に居て獲物の掛かるのを待期して居る、至つて利巧者である。造巢の方面より見る時は Genus *Theridion* に近似す

コガネマル *Tyrolida pulcher* の巢網

る様に思考される。然し土中に横走せる袋巢を有する點はむしろ原始的過程にあると云へる。本島に於ては伊ヶ谷、阿古兩村の道路の兩壁の凹處に多數見付けたが根掘りで掘り出す場合に失敗するが多く僅かに數匹を得た。

前記のイヌマダニ *Haemaphysalis flava* Neuman は神着村より雄山の北東斜面に到る道路の兩側の種なる植物（草丈1米迄）の葉裏に幼蟲 Larvae 及、亞成體 Nymph が密集して褐色を呈している。然し島人は今は少い時で以後益々増加すると、島人は元の壁蝨の咬傷を受けても何等の症狀をなさず即ち免疲性になつている。

三宅島産蜘蛛類 (Araneae)

1. Family Atypidae

1. <i>Atypus karschi</i> Doenitz	デグモ (方言フナジロ)
2. <i>Calommata signata</i> Karsch	ワスレナグモ

2. Family Theridiidae

1. <i>Theridion tepidariorum</i> L. Koch	オホヒメグモ

3. Family Linyphiidae

1. <i>Bathypantes dorsalis</i> Kishida ?	

4. Family Argiopidae

1. <i>Araneus fuscocoloratus</i> Bösenberg et Strand	ヤミイロオニグモ
2. <i>Araneus</i> sp.	
3. <i>Cyclosa insulana</i> Costa	シマゴミグモ
4. <i>Cyclosa argenteo-alba</i> Bösenberg et Strand	ギンメツキ
5. <i>Leucauge blanda</i> L. Koch	シロガネグモ
6. <i>Tyrolida pulcher</i> Kishida	コガネマル

5. Family Agelenidae

1. <i>Caelotes moellendorffi</i> (Karsch)	ヤチグモ

6. Family Lycosidae

1. <i>Lycosa</i> sp.	
2. <i>Lycosa</i> sp.	
3. <i>Lycosa</i> sp.	

7. Family Salticidae [=Attidae]

1. <i>Marpissa vittata</i> (Karsch)	ササノハヘトリグモ
2. <i>Plexippus incognitus</i> Doenitz et Strand ?	
3. <i>Salticus</i> sp.	

8. Family Heteropodidae

1. *Heteropoda venatoria* (Linnaeus)

アシダカグモ

以上の外の不明種は今後の研究を待つて發表する事とする。

著者が壁蝨調査の際種々便宜を與へられた林憲氏、常谷幸雄氏及び壁蝨の鑑定並びに調査に就いて種々助言を贈つた岸田久吉先生に衷心より感謝の意を表する次第である。

前 號 訂 正

1. 十三頁第一行に *Taleulifer* とあるのを *Faleulifer*, 第十行及挿圖の説明に *T. rostratus* とあるのを *F. rostratus* と御訂正願ひます。此の誤植は全く編輯子の不注意に依るものであります。著者福井博士に特にお詫申上ます。
2. 發起人名簿中木下周太、北尾淳一郎、仲宗根善守、鳥羽源藏、山路賀藤次諸氏の御芳名にも誤植がありました。深くお詫申上ます。又池田嘉平(新潟)とあるを(廣島)と訂正致します。尙尾崎光太郎氏は今回御都合上創立會員を辭して通常會員に御變更なされました。
3. 創立會員として新に次の四氏を追加致しますから御承知下さい。
中西悟堂(東京) 山川要助(三重) 古川雲堂(和歌山)
玉寺幸寛(福岡)
4. 四頁の會則第4條に(5, 6, 7, 10月)とあるは(5, 6, 9, 10月)の誤植であります。従つて創刊號と本號は一箇月づゝ發行が遅れてゐたわけですが、次號からは規定通に發行致したいと思つて居ます。
5. 以上の他小さな誤植が澤山ありますが又改めて訂正致します。

(責任者 植村)